

総論・春

群馬県立女子大学名誉教授 北川和秀

◎『万葉集』全巻によまれた植物ベストテン

- 1 はぎ（萩） 一四一
- 2 うめ（梅） 一一六
- 3 たちばな・はなたちばな（橘・花橘） 一〇七
- 4 すげ・すが・やますげ（菅・山菅） 七四
- 4 まつ（松） 七四
- 6 あし（葦） 五五
- 7 ち・あさぢ（茅・浅茅） 五〇
- 8 やなぎ・あをやぎ（柳・青柳） 四九
- 9 ふぢ・ふぢなみ（藤・藤波） 四四
- 10 さくら（桜） 四一

◎四季分類歌巻である巻八・巻十における植物

*別紙参照。

梅……………冬と春	萩……………秋
桜……………春	田・穂……………秋
柳……………春	朝顔……………秋
若菜……………春	黄葉……………秋
馬酔木……………春	尾花・薄……………秋
山吹……………春	浅茅……………秋
卯の花……………夏	女郎花……………秋
藤……………夏	松……………冬
橘……………夏	
撫子……………夏と秋	
草……………夏と秋	
葛……………夏と秋	

◎春と秋とを対比する歌

天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山の万花の艶と秋山の千葉の彩とを競憐はしめたまふ時、額田王、歌を以ちて判る歌

①冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれど 山を茂み 入りても取らず 草深み 取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取りてぞしのふ 青きをば 置きてそ嘆く そこし恨めし 秋山 われは(一・一六)

吉野の宮に幸しし時、柿本朝臣人麻呂の作る歌(そのうちの第二長歌)

②…(吉野の宮の高殿から国見をする) 置づく 青垣山 山神の 奉る御調と 春べは 花かざし持ち 秋立てば 黄葉かざせり…(一・三八)

◎春

【若菜】

天皇の御製歌

①籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岳に 菜摘ます児 家告らせ 名告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居れ しきなべて われこそ居れ われにこそは 告らめ 家をも名をも(一・一) 雄略天皇

山部宿祢赤人の歌四首(そのうちの一首)春雑歌

②明日よりは春菜採まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ(八・一四二七)

【わらび】

志貴皇子の權の御歌一首

○石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりけるかも(八・一四一八)

【梅】

四年丁卯春正月、諸王諸臣子等に勅して、授刀寮に散禁せしむる時に、作る歌一首 短歌を并せたり(そのうちの短歌)

①梅柳過ぐらく惜しみ佐保の内に遊びしことを宮もとどろに(六・九四九)

右は、神亀四年正月、数王子また諸臣子等、春日野に集ひて、打毬の樂を作す。その日 忽に天陰り雨ふり雷なり 電す。この時に宮の中に侍従と侍衛と無し。勅して刑罰に行ひ、皆授刀寮に散禁して妄りて道路に出づることを得ずあらしむ。時に悒憤して、この歌を作る。 作者詳らかならず

梅花の歌三十二首 序を并せたり（そのうちの八首）

天平二年正月十三日、帥の老の宅に萃まり、宴会を申ぶ。

時に、初春の令月にして、気淑く風和らぐ。

梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。

加之、曙の嶺に雲を移し、松は羅を掛けて蓋を傾け、

夕の岫に霧を結び、鳥は穀に封されて林に迷ふ。

庭には舞ふ新蝶あり、

空には帰る故雁あり。

ここには、天を蓋とし地を坐とし、

膝を促け、觴を飛ばす。

言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。

淡然として自ら放にし、快然として自ら足る。

若し翰苑に非ざれば、何を以てか情を攄べむ。

詩に落梅の篇を紀す。

古今それ何ぞ異ならむ。

宜しく園梅を賦みて、聊かに短詠を成すべし。

② 正月立ち春の来らば斯くしこそ梅を招きつつ楽しき終へめ 大式紀卿（五・八一五）

③ 梅の花今咲ける如散り過ぎずわが家の園にありこせぬかも 小式小野大夫（八一六）

④ 梅の花咲きたる園の青柳は藪にすべく成りにけらずや 小式粟田大夫（八一七）

⑤ 春さればまづ咲く宿の梅の花独り見つつや春日暮さむ 筑前守山上大夫（八一八）

⑥ 世の中は恋繁しゑや斯くしあらば梅の花にも成らましものを 豊後守大伴大夫（八一九）

⑦ 梅の花今盛りなり思ふどち挿頭にしてな今盛りなり 筑後守葛井大夫（八二〇）

⑧ 青柳梅との花を折り挿頭し飲みての後は散りぬともよし 笠沙弥（八二一）

⑨ わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも 主人（八二二）

（以下、省略）

（以下、省略）

故郷の家に還り入りて、即ち作る歌三首（そのうちの一首）

⑩ 吾妹子が植ゑし梅の樹見ることこころ咽せつつ涙し流る（三・四五三）

大伴坂上郎女の歌一首

⑪ 沫雪のこの頃過ぎて斯く降れば梅の初花散りか過ぎなむ（八・一六五一）冬雑歌

山部宿祢赤人の歌四首（そのうちの一首）春雑歌

⑫ わが背子に見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪の降れば（八・一四二六）

(天平勝宝)五年正月四日、治部少輔石上朝臣宅嗣の家にして宴する歌三首(そのうちの二首)

⑬事繁み相問はなくに梅の花雪に萎れて移ろはむかも(一九・四二八二)

右の一首は、主人石上朝臣宅嗣のなり。

⑭梅の花咲けるが中に含めるは恋や籠れる雪を待つとか(四二八三)

右の一首は、中務大輔茨田王のなり。

十一日大雪落り、積ること尺二寸あり。因りて拙き懷を述ぶる歌三首(そのうちの一首)

⑮鶯の鳴きし垣内にはほへりし梅この雪に移ろふらむか(一九・四二八七)

二月、式部大輔中臣清麻呂朝臣の宅に宴する歌十五首(そのうちの一首)

⑯梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしそ思ふ(二〇・四五〇〇)

右の一首は、治部大輔市原王のなり。

【やなぎ】

柳を詠む(春雑歌)

①浅緑染め懸けたりと見るまでに春の楊は萌えにけるかも(一〇・一八四七)

②朝な朝なわが見る柳鶯の来居て鳴くべき森に早なれ(二八五〇)

③ももしきの大宮人の覆ける垂柳は見れど飽かぬかも(二八五二)

④梅の花咲きたる園の青柳を覆にしつつ遊び暮さな 小監土氏百村(五・八二五)

⑤うち靡く春の柳とわが宿の梅の花とを如何にか分かむ 大典史氏大原(八二六)

(天平勝宝二年三月)二日、柳黛を攀ちて京師を思ふ歌一首

⑥春の日に張れる柳を取り持ちて見れば都の大路思ほゆ(一九・四一四二)

【つばき】

大宝元年辛丑の秋九月、太上天皇の紀伊国に幸しし時の歌

○巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ思はな巨勢の春野を(一・五四)

右一首、坂門人足

【あしび】

大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時、大来皇女の哀しび傷む御作歌
二首

① うつそみの人にあるわれや明日よりは二上山を弟世とわが見む（二・一六五）

② 磯のうへに生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありと言はなくに（一六六）

右一首、今案ふるに、移し葬る歌に似ず。けだし疑はくは、伊勢の神宮より京に還る時、路のへに花を見て感傷哀咽してこの歌を作るか。

山齋を属目で作る歌三首

③ 鴛鴦の住む君がこの山齋今日見れば馬酔木の花も咲きにけるかも

右の一首は、大監物御方王のなり。 （二〇・四五一一）

④ 池水に影さへ見えて咲きにほふ馬酔木の花を袖に扱入れな（四五一二）

右の一首は、右中弁大伴宿祢家持のなり。

⑤ 磯影の見ゆる池水照るまでに咲ける馬酔木の散らまく惜しも（四五一三）

右の一首は、大蔵大輔甘南備伊香真人のなり。

【かたかご】（かたくり）

堅香子草の花を攀ぢ折る歌一首

○もののふの八十娘子らが汲み乱ふ寺井の上の堅香子の花（一九・四一四三）

【さくら】

① 梅の花咲きて散りなば桜花継ぎて咲くべくなりにてあらずや 薬師張氏福子

（五・八二九）

山部宿祢赤人の歌四首（そのうちの一首）春雑歌

② あしひきの山桜花日並べて斯く咲きたらばいと恋ひめやも（八・一四二五）

春三月、諸卿大夫等の難波に下りし時の歌二首 短歌を并せたり（そのうちの長歌一首と反歌）

③ 白雲の 龍田の山の 滝の上の 小桜の嶺に 咲きををる 桜の花は 山高み
風し止まねば 春雨の 継ぎてし降れば 秀つ枝は 散り過ぎにけり 下枝に
残れる花は 須臾は 散りな乱れそ 草枕 旅行く君が 還り来るまで

（九・一七四七）高橋虫麻呂

反歌

④わが行きは七日は過ぎじ龍田彦ゆめ此の花を風にな散らし（一七四八）

花を詠む（春雑歌）

- ⑤あしひきの山の間照らす桜花この春雨に散りゆかむかも（一〇・一八六四）
⑥春雨は甚く降りそ桜花いまだ見なくに散らまく惜しも（一八七〇）
⑦見わたせば春日の野辺に霞立ち咲きにほへるは桜花かも（一八七二）

【もも・すもも】

（天平勝宝五年二月）二十三日、興に依りて作る歌二首

- ①春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ娘子（一九・四一三九）
②吾が園の李の花か庭に散るはだれのいまだ残りたるかも（四一四〇）

【むらさき】

天皇、蒲生野に遊獵したまふ時、額田王の作る歌

- ①あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る（一・二〇）額田王
皇太子の答へましし御歌 明日香宮に天の下知らしめしし天皇、諷して天武天皇といふ
②紫草のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも（二一）大海人皇子
紀に日はく、天皇七年丁卯、夏五月五日、蒲生野に従獵したまふ。時に大皇弟・諸王
・内臣と群臣、悉皆に従そといへり。

笠女郎、大伴宿祢家持に贈る歌三首（そのうちの一首）譬喩歌

③託馬野に生ふる紫草衣に染めいまだ着ずして色に出でにけり（三・三九五）

【すみれ】

山部宿祢赤人の歌四首（そのうちの一首）春雑歌

①春の野にすみれ採みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける（八・一四二四）

高田女王の歌一首 高安の女なり

②山吹の咲きたる野辺のつぼすみれこの春の雨に盛りなりけり（八・一四四四）

【やまぶき】

十市皇女 薨りましし時、高市皇子尊の御作歌三首（そのうちの一首）

①山振の立ち儀ひたる山清水酌みに行かめど道の知らなく（二・一五八）

紀に日はく、七年戊寅夏四月丁亥の朔の癸巳、十市皇女卒然病発りて宮の中に薨りましぬといへり。

厚見王の歌一首

②蝦鳴く神名火川に影見えて今か咲くらむ山吹の花（八・一四三五）

山吹の花を詠む歌一首 短歌を併せたり

③うつせみは 恋を繁みと 春設けて 思ひ繁けば 引き攀ちて 折りも折らずも

見る毎に 情和ぎむと 繁山の 谿辺に生ふる 山吹を 屋戸に引き植ゑて

朝露に にはへる花を 見る毎に 思ひは止まず 恋し繁しも（一九・四一八五）

④山吹を屋戸に植ゑては見るごとに思ひは止まず恋こそ益れ（四一八六）

【つつじ】

四年壬申、藤原宇合卿の西海道節度使に遣さるる時に、高橋連虫麻呂の作る

歌一首 短歌を併せたり

①白雲の 龍田の山の 露霜に 色づく時に うち越えて 旅行く君は 五百重山
い行きさくみ 賊守る 筑紫に至り 山の極 野の極見よと 伴の部を 班ち遣
はし 山彦の 答へむ極み 谷墓の さ渡る極み 国形を 見したまひて 冬ご
もり 春さりゆかば 飛ぶ鳥の 早く来まさね 龍田道の 岡辺の道に 丹つつ
じの にははむ時の 桜花 咲きなむ時に 山たづの 迎へ参る出む 君が来ま
さば（六・九七一）

鷺坂にして作る歌一首

②細領中の鷺坂山の白躑躅われににははね妹に示さむ（九・一六九四）

万葉集卷八・十によまれた四季の植物

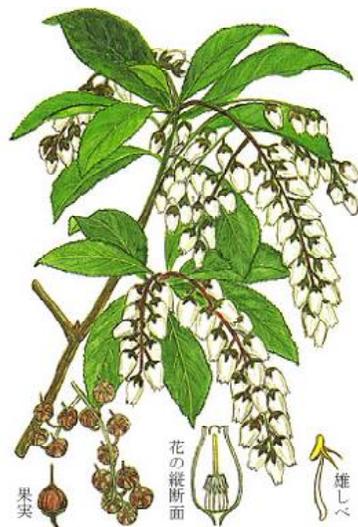
	春 (八・十)	夏 (八・十)	秋 (八・十)	冬 (八・十)	計
梅	29 (8・21)	0 (0・0)	0 (0・0)	24 (15・9)	53
桜	17 (8・9)	0 (0・0)	0 (0・0)	0 (0・0)	17
柳	16 (2・14)	0 (0・0)	0 (0・0)	0 (0・0)	16
若菜	4 (3・1)	0 (0・0)	0 (0・0)	0 (0・0)	4
馬酔木	4 (1・3)	0 (0・0)	0 (0・0)	0 (0・0)	4
山吹	4 (2・2)	0 (0・0)	0 (0・0)	0 (0・0)	4
卯の花	1 (0・1)	14 (5・9)	0 (0・0)	0 (0・0)	15
藤	1 (0・1)	4 (1・3)	1 (1・0)	0 (0・0)	6
橘	0 (0・0)	27 (14・13)	0 (0・0)	0 (0・0)	27
撫子	1 (1・0)	5 (2・3)	4 (4・0)	0 (0・0)	10
草	1 (0・1)	4 (0・4)	4 (1・3)	0 (0・0)	9
葛	1 (0・1)	2 (0・2)	4 (1・3)	0 (0・0)	7
萩	0 (0・0)	1 (1・0)	109 (34・75)	0 (0・0)	110
田・穂	0 (0・0)	0 (0・0)	32 (11・21)	0 (0・0)	32
朝顔	0 (0・0)	0 (0・0)	4 (1・3)	0 (0・0)	4
黄葉	0 (0・0)	0 (0・0)	77 (26・51)	1 (0・1)	78
尾花・薄	0 (0・0)	0 (0・0)	18 (6・12)	1 (1・0)	19
浅茅	1 (0・1)	0 (0・0)	7 (3・4)	2 (1・1)	10
女郎花	1 (0・1)	0 (0・0)	6 (3・3)	0 (0・0)	7
松	1 (0・1)	0 (0・0)	0 (0・0)	4 (2・2)	5



635. ヤマザクラ (改枚1221)



2466. カククリ (改枚3154)



1215. アセビ (改枚2177)



1601. シダレヤナギ (改枚99)



620. ウメ (改枚1206)



1167. ヤマトツジ (改枚2131)



466. ヤマブキ (改枚1089)



1550. スミレ (改枚1840)



625. スモモ (改枚1210)



627. モモ (改枚1212)

『原色牧野植物大図鑑』による